



Wilhelm・Conrad・Röntgen
ヴィルヘルム・コンラート・レントゲン
1895年 X線発見

放射線だより

2024年6月
No. 26 (隔月発行)
担当：馬場

from Radiation House

DWIBS(Diffusion-weighted Whole body Imaging with Background body signal) 検査について

DWIBS検査？

・MRI装置を使用して全身にわたってがんや転移を探す全身がん検査です。

MRIの高性能化によって可能となりました。

頸部～骨盤部を1度の検査で撮影し、がんリスクを調べることができます。

・昨年度のMRI装置機器更新により当院でも全身DWI MRI検査が可能になりました。

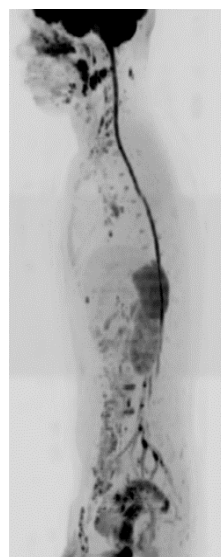
RI・PET検査との違い

・今までは全身のがん病変を検査することができるのはPET-CT検査が代表的でした。

PET-CT検査がブドウ糖代謝により病変を検出するのに対して、DWIBS検査では細胞の密度の増加により病変が光らせて検出します。

・DWIBS検査も胃がんや大腸がんの検出に不向きなのは同じですが、腎がん・尿管がん・前立腺がん等の尿路系がんや骨転移等の診断には適しています。

ただし、DWIBS検査も小さい病変の検出は難しいという弱点があります。また体動に弱いため長時間の検査が困難の患者さまの場合も検査が難しい場合があります。



DWIBS検査の予約方法等、MRI検査に何かご不明な点等あればMRI室にお声かけ下さい。
よろしくお願い致します。

(文責 横田)

STATについてご存じでしょうか？

STATとは、画像診断において、診療放射線技師が撮影後の画像所見を医師に伝えることです。

STAT画像？

●STAT [Stáét]: Statim [stétim]の略
⇒直ちに

ラテン語

医学英和大辞典（南山堂）より

STAT画像とは

⇒直ちに医師の確認を要する画像

- ✓患者の生命を脅かす恐れがある
- ✓速やかな治療を必要すると考えられる
- ✓読影に影響するアーチファクトを含んでいる など

厚生労働省医政局の「チーム医療の推進に関する検討会」にて診療放射線技師は、

(1) 画像診断における読影の補助を行うこと、

(2) 放射線検査等に関する説明・相談を行うこと、

が具体例として挙げられ、診療放射線技師を積極的に活用することが望まれました。

なぜ診療放射線技師の所見なのか

撮影後の画像を一番最初に目にするのが診療放射線技師だからです。また、診療放射線技師は普段から撮影モダリティに触れ、原理や技術を把握しているため、専門性が高い提案や見解が期待できます。本来、読影は放射線科医が行いますが、特に緊急性が高い場合は、最初に画像を目にする診療放射線技師が初見を判断し医師へ報告することで、より早い診断や治療に繋がります。この対応の早さが、患者の生死を分ける場面もあるでしょう。

表1 診療放射線技師が発見した場合に報告すべき STAT 画像所見と想定される疾患一覧

モダリティ	部位	所見	想定される疾患
一般撮影	胸部	肋間腔開大、縦隔の健側への偏位を伴う気胸	緊張性気胸
		(胸部単純X線写真) 腹腔内 free air	消化管穿孔を念頭においた所見の指摘
	腹部	(腹部単純X線写真) 腹腔内 free air	消化管穿孔を念頭においた所見の指摘
CT	頭部	頭蓋内出血	脳内出血、くも膜下出血、硬膜下血腫、硬膜外血腫など
		脳の腫瘍	脳腫瘍など
	腹部	肋間腔開大、縦隔の偏位を伴う気胸	緊張性気胸
		腹腔内 free air	消化管穿孔を念頭においた所見の指摘
		腸管の air-fluid level 形成・腸管拡張	腸閉塞/イレウスの検出を念頭においた所見の指摘
血管	腹部の出血	肝臓破裂、内臓動脈瘤破裂、異所性妊娠や交通外傷などに伴う腹腔内出血・血腫形成の指摘を念頭においた所見の指摘	
	径 6 cm 以上の上行大動脈、径 7 cm 以上の下行大動脈、径 5.5 cm 以上の腹部大動脈	破裂のリスクが高い大動脈瘤	
MRI	頭部	拡散強調画像での異常高信号域	脳梗塞、脳炎・脳症、脱髄疾患など
		脳外の異常信号域	くも膜下出血、硬膜下血腫、硬膜外血腫など

当院放射線技術部でもSTAT画像の報告ができるよう、日々業務に取り組んでいます。



文責：田島